

「瀬戸内海の気象と海象」の発行にあたって

海洋気象学会 会長 石田 廣史

古くから神戸港は国際的に開かれた国際港であり、国内外の船舶の往来が多いことから、ドイツの海洋気象台に倣って、航海の安全と効率的な船舶の運航を進めるべく、神戸に海洋気象台を建設することが図られてきました。大正7年（1918年）第1次世界大戦後の好景気の神戸海運業者等に海洋気象台建設費の寄付を募り、大正9年（1920年）に神戸に海洋気象台が設立されました。

大正10年（1921年）には、海洋気象台内に事務局を置いた海洋気象学会の前身である神戸時習会が設立され、以来、海洋気象学会は海洋気象及びこれに関する研究の発展を図り、且つその知識の普及を行ってきました。

昭和27年（1952年）に神戸海洋気象台が発行しました「瀬戸内海の気象と海象」（神戸海洋気象台彙報第161号）の内容は、瀬戸内海地域の交通や水産さらに各種産業など多岐に亘り、瀬戸内海地域の産業発展に大きく寄与し、瀬戸内海のバイブル的な参考書として活用されました。その後、本州・四国架橋計画に伴い、大がかりな瀬戸内海の調査が進められ、その膨大な調査資料も取り入れられた「瀬戸内海の気象と海象」改訂版が、昭和42年（1967年）に海洋気象学会「海の気象13巻1・2合併号」として発行されました。その後、瀬戸内海周辺地域の産業が著しく発展した反面、瀬戸内海の環境汚染が進みました。そして、その環境汚染を防止する目的で、1970年代に瀬戸内海環境保全のための法律が整いました。その著しい環境変化に対応した「瀬戸内海の気象と海象」特集号（海の気象第35巻5・6合併号）が平成2年（1990年）に発行され、その後20年以上の年月が経過し、現在に至っています。

一時は、大阪湾を始めとして瀬戸内海の多くの海域は「瀕死の海」と呼ばれるほど水質汚濁が進んだ状況でしたが、水質汚染物質の総量規制制度や瀬戸内海環境保全基本計画に基づく施策が進み、現在ではかなり自然環境は回復したと言われています。しかし、さらに「豊かな海」を目指し、「瀬戸内海研究会議」や「今後の瀬戸内海の水環境の在り方懇談会」など、瀬戸内海の利活用や環境保全に対する活発な活動も展開されていることから、今回、その内容を新たに「瀬戸内海の気象と海象」を発行することになりました。

本書が、「更なる豊かな海」と「持続的発展可能な海」を目指す瀬戸内海の、新たな参考書として活用される事を願って止みません。

編集にあたって

「瀬戸内海気象と海象」発行委員の代表者 西 山 勝 暢(元気象庁)

わが国では一般に家を建てる時に、風が通りやすいように「窓や開き戸を北と南に造る」ことを考えます。瀬戸内海地方はこのような開口部分を南北ではなくて東西に設けることを良く耳にしました。その理由は、冬は北風、夏は南風と、一般的に日本列島に吹くのは南北の風が卓越しますが、瀬戸内海地方は、その地形がもたらすために東西の風が卓越するためです。さらに、瀬戸内海に風が吹くとその地形により、山越え気流による「六甲おろし」や「やまじ風」など、また、瀬戸内海地方は「春一番」が吹いても四国山地と中国山地にはさまれる所に冷気がたまったままで、「フェーン」とならず、「吹き抜け低気圧」と呼ばれる現象、さらに「晴れ霧」や「肱川あらし」など瀬戸内海地方独特の天気にかかわる現象がみられます。一方、瀬戸内海にいたるところで「渦潮」や「海釜」がみられます。とくに鳴門海峡に現れる「渦潮」は、世界に類がない珍しいものです。この潮汐がもたらす潮流ですが、この潮流はまた「営力(地形を変化させる力)」となって、これもまた世界に珍しい「海釜」を瀬戸内海のいたるところの海底にもたらしめます。一方、水産界で瀬戸内海は栄養塩の流入負荷量と植物プランクトンの現存量が世界でも稀に見る豊かな海のようにです。特に大阪湾はプランクトンを餌料とするプランクトン食性の魚介類の占める割合はきわめて高く、瀬戸内海が魚介類だけでなくカキやノリなどの養殖漁業生産にも恵まれた海域といえます。これらも瀬戸内海が灘や湾の比較的広い海域が瀬戸や海峡と呼ばれる狭い水路で結ばれているところに潮流による複雑な流れが瀬を作ったり、栄養塩を運んだりして、それが漁場にも反映されています。

日本で最初の国立公園として1934年に指定され、日本の人口や経済などの国力の3分の1ほどを占める瀬戸内海地方、その戦後の「復興・発展を資する資料」として1952年に「瀬戸内海の気象と海象」が神戸海洋気象台により発行されました。そこにはその後「改篇・増補」してゆくとあり、神戸海洋気象台と海洋気象学会により1967年に発行されたものには、本州・四国連絡架橋のため調査された資料を基に「瀬戸内海の海難防止・産業開発」を目的として、そして1990年には、1970年代に「瀬戸内海環境保全特別措置法」が成立した後の「著しい環境の変化に対応」のためとその発刊の主旨が述べられています。

さて、瀬戸内海が「豊かな海」を目指した様々な最近の動き(例えば「瀬戸内海研究会議」)などがあります。本誌では、風と潮汐がもたらす「瀬戸内海は興味わく面白いことのいっぱいある海である」といえる現象を中心に「瀬戸内海の気象と海象」の最終版を上梓します。この小誌が、今後の瀬戸内海が「豊かな海」となるために水産業や輸送産業、さらに観光資源などに貢献できることを期待しています。